

### 伝承技術文化と美意識を 現代生活に再生、覚醒しよう

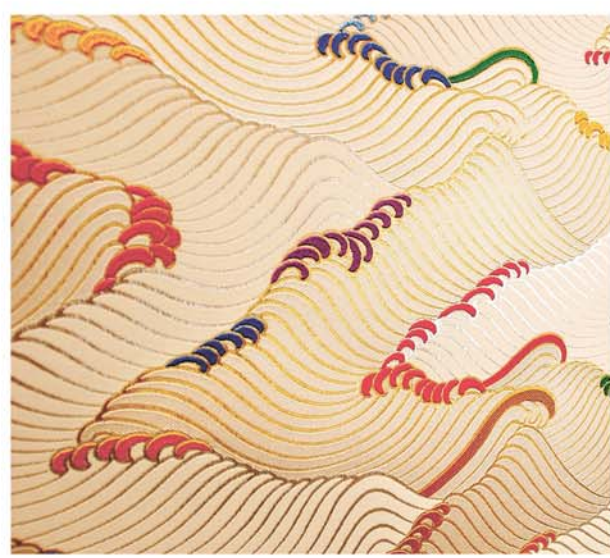
わが国の伝統的な美術工芸品は、古代から自然を愛で、慈しみ、自然と共に生きてきたわれわれ日本人の生活文化の精華である。1867年のパリ万国博に出展され、西欧の人々に大きな反響を巻き起こし、後にアール・ヌーボーや印象派などに影響を与えたのは、漆芸、陶芸、金工、木工そして版画などの西洋の概念でいう「装飾美術工芸品」であった。錦織をはじめとする絹織物もその中に含まれている。アール・ヌーボーの創始者であったサミュエル・ビングが予言した通り、わが国ではこの「生活文化のなかの芸術」、即ち伝統的美術工芸品は、明治以降衰退の一途をたどってきた。西洋化、近代化を急ぐ明治政府は、洋風の生活様式とともに、積極的に西洋の概念や制度を採り入れ、その結果現在にも続く、美術や工芸の諸制度が構築され、同時



龍村光峯  
織物美術家

にそれらと伝統的なあり方との間に著しいそごを生じてきた。わが国では、江戸時代までアジア・アフリカなどの非西欧の世界がそうであるように「美術」や「工芸」の区別は無かったのだが、ここに絵画・彫刻などの「純粋美術」と工芸などの「応用美術」の区別が持ち込まれ、絵画・彫刻を上位概念とするヒエラルキー構造や、洋画・日本画の二重構造が出来上がり、伝統的な美術工芸品は「応用美術」として一段低く見られるようになったことが、衰退の原因の一つではないだろうか。われわれが今日「伝統」と呼んでいる

もの、あるいは「伝統」という概念そのものが、実は明治以降の近代化の産物であり、西欧列強の各国が近代国家の成立や民族主義の勃興のうねりの中で、自国の文化を誇っているのを目の前にした明治政府が、わが国にもこのような「伝統」が存在するというものを世界に示すべく、意識的に、また文化政策として創出したものではないかというところも考えられる。現在の伝統工芸の衰退は、明治以降の西洋化近代化によって生活様式が激変し、時に戦後のアメリカ化、あるいは最近ではグローバル化によって、生活の根本か



●たつむら・こうほう  
1946年、宝塚市生まれ。71年、早稲田大学卒業。76年、龍村平蔵織物美術研究所設立。94年、古代織物の復元、技術保存を目的に「日本伝統織物保存研究会」を設立、理事長として正倉院製「緑地花鳥文錦」などを復元する。代表作に旧大蔵省三田会館所納入タペストリー「和の集」、国立京都迎賓館主賓室タペストリー「纂織図(一対)」など。

### 旅の本来の意味失った 効率本位の現代社会

「旅」が日本人の忘れものだとすると、とんでもない。誰もが今ほど盛んに旅をする時代はないはずだという反論が即座に返ってきそうだ。確かに海外出張は少しも珍しくなくなっているし、旅行代理店の棚には無数の旅行案内のパンフレットがひしめいている。私がサラリーマンになりたての40数年前は、同僚が海外に出る時には、みんな羽田まで見送りに行ったものだが、



建畠 暫  
京都市立芸術大学学長

的地向とピンポイントで回るだけの旅になってしまっている。移動すること自体に意味があったはずである。旅人とはいうならば移動から生まれる物語に身をゆだねようとしている人であり、当然ながら目指す場所に着くまでの時間が短ければ短いほどいいというのではない。出張やパツク旅行は「旅」に入らないかと分かったよいうなことをいうつもりもない。ただ問題は、旅がともすれば効率本位になり、移動時間は余計な時間と思われるてしまいがちなことだ。出発地から目

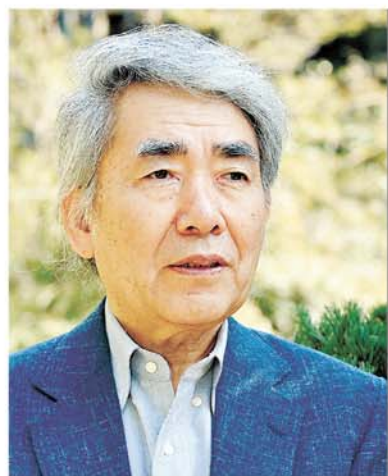
の地へというわけだ。私は毎週のように新幹線のお世話になっていてから文句を言えた義理ではないのだが、このたえよともなく便利な乗り物によって、十返舎九の「膝栗毛」をはじめとする数多くの物語を育んできた東海道の旅は、今や単なる日帰り出張の往復時間に成り下がってしまったように思える。目下喧伝されているリニア新幹線なるものは、それをさらに通勤時間に過ぎぬものへと貶めてしまおうに相違ない。スピードのオペレーションは地上からすべからず旅を放逐しつつあるのである。



●たてはた・あきら  
1947年、京都市生まれ。美術評論家、早稲田大学卒業。京都市立芸術大学学長。多摩美術大学教授、国立国際美術館長などを経て現職。90年、93年のベネチアエンターレ展日本館コミッション。2001年の横浜トリエンナーレ、10年のあいちトリエンナーレの芸術監督。詩人としては昨年「死語のレッスン」で萩原明太郎賞を受賞。

### 自然の豊かき、生活の豊かきは 何気ない日常のなかにこそある

昨年「近代秀歌(岩波新書)」という本を出した。近代の短歌の中で、たまたま歌人でなくても、これだけは知っておいて欲しいと思う歌を百首紹介し、鑑賞したものである。それを書いていく過程で、「歌の持つ力」というものを改めて感じるとともに、歌を日常の場に取り戻してやることの大切さも思った。短歌・和歌と聞くとうろたうしても難しいもの、正座して読まねばならないもの



永田和宏  
京都産業大学総合生命科学研究部教授

しづかに飲むべかりけり 若山牧水  
友人たちと飲みながら、誰からともなく牧水の酒の話になる。「牧水は一日に一升なのよ、自分では言っていたが、ほんとともっとはるかに多かったんだって」と言うやつがいると、「死んでも三日くらいは死斑が現れなかつたぞうだ、なにしろアルコール漬けなんだから」なんて応じるやつがいる。こんな話題が飛び交う飲み会なら、出てみたいものだと思ふ。  
京都はどこを歩いても、歌枕に出会うことのできる地である。こんな恵

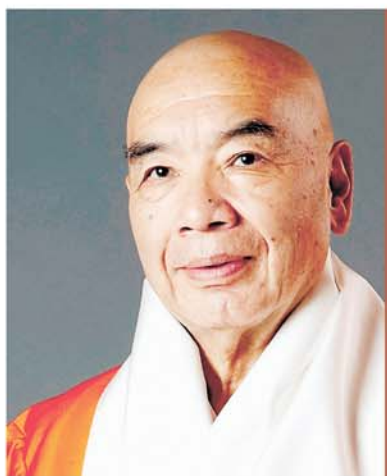
まれた場所他にはない。歌枕がなぜ意味をもつか。それは私たちがその場所が詠われた歌を知っているからである。  
清水へ祇園を抜ける桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき 与謝野晶子  
という一首が、ふと頭をよぎるとき、自分が歩いているその場の風景は、少しいただき違ってみえてくるはずである。歌を知っているからといって、何を



●ながた・かずひろ  
1947年、滋賀県生まれ。京都大理学部卒。京都大再生医科学研究部教授を経て、現職。大学在学中に本格的に短歌を始め、芸術選奨文部科学大臣賞や斉藤茂吉短歌文学賞など受賞多数。2009年、紫綬章。短歌新社「塔」主宰。近著に「近代秀歌」など。

### 「いのち」から「いのち」へ 畏敬の念を持ち、国境なき祈りを

京都—この古都の古い歴史、時の流れは、私たちに多くの夢ときめきをもたらします。水の都と呼ばれるように、清らかな澄んだ川の流れる。その源には都を囲む山々があり、折々の語らいと祈りを秘めています。神々が集い、諸仏菩薩が雲集し、人々の生活を通して文学、芸術が生まれ、多くの「いのち」が育まれた大きな神秘性



仲田順和  
総本山醍醐寺座主

えない「いのち」があります。目に見える「いのち」は、自分が生きているこの「いのち」です。この「いのち」は自分自身が感じることが出来る「いのち」です。また、目に見えない「いのち」とは、私たちと同じように、自分自身に与えられた時間を使い切った人々の「いのち」です。  
父母の「いのち」であり、祖父祖母の「いのち」でありましょう。それを私たちは、先祖様と呼び、衆生の「いのち」と表現しています。西方へ旅立つた多くの人々の「いのち」、これが「目に見えない「いのち」」です。この

「目に見えない「いのち」」に呼びかけることにより、自分の心のたすまいをたすむことができます。目に見える「いのち」に対する祈りを、「祈願」と呼び、目に見えない「いのち」に対する祈りを、「廻向」と呼びます。廻向は追善とか追福という言葉でも表されています。  
そして、この祈りの世界で、今日なお祈り続けることができるのは、人は自然の中で生き、「縁」をもつて大きな弧を描きながら「いのち」から「いのち」へと受け継がれる循環の尊さがあるからです。この尊さに対して、



●なただ・じゅんな  
1934年、東京都生まれ。大正大学にて仏教原典を中心に研究を進める。57年、品川寺に入山、出家。68年、品川寺住職となり、85年より総本山醍醐寺執行長となり、2010年、総本山醍醐寺座主三宝院門跡となる。医療法人洛和会理事、学校法人日本女子大、森村学園、真言宗洛南学園の評議員を務めている。